

# 最近の文学作品

## ■フランス語関係

◇ロッシユ・キャリエ「Un pays sans grand-père (祖父のいない国はない) エディション・アンテルナショナル、一九七七年刊

主人公は、ヒュー・トーマス。自分を軽蔑し冷笑する家族たちの中にあつて、彼はよろよろと死を待ちながら、自分の一生を静かに振り返る。陽気で楽しかった青年時代、木こりの仕事、自分を取りまく世界の進展——戦争、身の不運や災難、遅々としたケベックの抗争など…。

長い内面の独白でつづつたこの物語は、作者ロッシユ・キャリエの六番目の小説であり、前の全作品と同じように、優しさとユーモアと力に満ち、輝くような作品となっている。全体にみなぎる深い人間愛、筋立ての単純さ、平易な用語など、ケベック文学の伝統はこれでまた一層豊かになったといえる作品である。

◇ナウム・カッタン「La Traversée (十字路) エルチエビスHMH、一九七七年刊

作者ナウム・カッタンはバグタッド生まれ。パリに学び、カナダにやってきたのは二〇年ほど前だが、骨の髄からのカナ

ダ人だ。ラベル大学で教鞭をとるかたわら、たくさんの本を書いた。現在はカナダ・カウンシル(カナダ文化振興会)の文学部門の長の地位にあり、小説、随筆、脚本、評論などに多彩な活動をくりひろげている。

短編小説集「Le Traversé」には、ナウム・カッタンのカナダに対する深い理解が示されていて興味深い。舞台はさまざまな都会であり地方であるが、精密な背景設定をみると、作者が微妙な陰影まで十分に計算に入れているのがわかる。

標題になった短編「The Crossing (十字路)」では、この本全体のテーマ、つまり旅によって人々は別離と出合いを繰り返すのだ、ということが語られている。「Le Voyage (旅)」では、アフリカで出会い、結婚した若い二人が妻の故郷モントリオールに帰ってくる。フランス人の夫ピエールは、妻モニクが家族や住んでいる町や文化に押し潰され、アライバシーも侵害されている、と考える。やがてピエールが去っていくと、彼女は何かほっと救われたものを感じてしまう。

「Le Prochain Avion (次の便)」は、結末を暗示するように、トロントのCNタワーのエレベーターの中で出会う二人

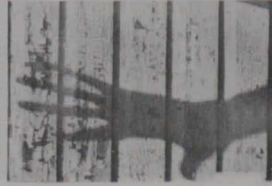
の話。女はニューヨークへ、男はやはりどこかの故郷の町へ帰る途中である。二人の間には恋が芽生えるが、セックスまでには至らない。彼女は何度か出発便を見送り、ついに空港で翌日までここに残りますと告白するのだが、すでにもう遅すぎるのだった。彼女はなぜ自分にも男にも自然の喜びを拒んだのか。自らを偽ったのだろうか：判断は読者にゆだねられている。

◇アンドレ・マジヨール「Les Rescapés (生き残った者達) エディション・カンズ、一九七六年刊

アンドレ・マジヨールの初期の作品(主に詩と論評)は有力な急進的雑誌「パルティ・プリ」に発表されている。「パルティ・プリ」というのは雑誌の名前であると同時に、一九六〇年代にケベック州の世俗化と社会主義化と独立を唱えたグループの名前で、マジヨールはやがてこのグループから離れ、作家活動(主に小説)に専念するようになった。「Les Rescapés」は「Histoires de déportés (逃亡者の歴史)」という副題をもつ三部作の最後の作品で、昨年の春マジヨールはこれでカナダ総督賞をもらった。この三部作は全体として読んで初めて疑問が明らかになり、謎が解かれ、ギャップが埋められるという性格の作品である。

「逃亡者」

マジヨールの「Les Rescapés」



はときに都会人であり、あるいは田舎者である。平凡な者はいるが

ステレオタイプな者は一人もいない。農村と都市の分裂という問題も浮き彫りにされる。三部作の中心人物はモモ。モントリオールの都会っ子は、モモのことを「田舎っぺ」と呼ぶ。この大都会はモモの恋人ジジ(コールガールになって後に殺されてしまう)に対しても、セント・エマニュエルのホテル経営者の妻(夫婦仲はとつづく昔に冷えきっている)とその妹にも、そしてまたモモに対しても、ほんの一時の救いしか与えてやれない。三部作のうち最初の「L'Épouvantail (案山子)」は、「The Scarecrows of Saint-Émmanuel (セント・エマニュエルの案山子)」という題ですでに英訳されており、あとの作品もいずれ英訳されるだろう。

## ■英語関係(フランス語からの英訳も含む)

◇ヒュー・アトキン「A New Ateneo (新しいアテネ) オベロン社、一九七七年刊

この小説は、一九五〇年代のストーバービル(オンタリオ州)およびその周辺に住む人々の物語である。一人称形式で物語はすすめられる。語り手の主人公はマット・ゴードリッチという名前の悪意のない人物で、若干ラジカリストの国会議員を父にもつ。彼はストーバービルに住む裕福な娘たちの大半と淡い恋におちるが、やがてその中の一人、中規模金物店を営む実力者の娘エディ・コッドリントンと深い仲になる。

「A New Ateneo」は、E.M.フォスターの「Howard's End」と同じような意味で実に素晴らしい作品だ。巧みで真実味のある筆致、時と場所と社会階級を写実絵